



善く生きる

学校長

飯山 等

何をするか、何を生きていくかということは、私たちが人生を歩んでいくうえで大きな問題です。特に中学を卒業しようとしている今の皆さんにとって大きな関心事として、考え、悩んでいる人も多いかと思います。しかしまた、何をするかということに突き当たり、悩むことは一生生きることはないのでしょうか。そして何を生きていくかとともに、そのことと同じくらい大切だと思うのは、それをどのようにするかということではないでしょうか。

もう25年以上前のこと、「ベルリンフィル12人のチェリストたち」というグループの演奏会に行きました。当日のプログラムのメインは、ビートルズの曲を作曲家・三枝成彰氏が編曲したもの。進行司会の三枝氏自身のユーモアを混じえながらのレコーディング収録のときのお話が今も心に残っています。

氏が先ず驚いたのは、渡された楽譜をつっかえつっかえ、繰り返し弾いていることでした。世界を代表するオーケストラのメンバーです。当然優れた奏者の集まりです。日本の音楽大学の学生ならば初見でさらっと弾けそうなものなのに。しかし、氏はまもなくして、もう一度、深く驚くことになったのです。彼らが何度も何度も弾き込んでいくと、その曲が素晴らしいレベルまで、作曲家自身の思いを超えた表現のところまで仕上げられていったことです。そして氏は気がついたのです。彼らがつっかえつっかえしていたのは、技術の不足の表れではなく、曲の、フレーズの心をくみ取ろうとしていたからだということ。

そう語る氏のことばに深く感動しながら、私は思いました。これは人生についても言えることだ。《初見》で生きちゃいけない。楽譜と向き合う音楽家の真剣さ。人生を生きることは、楽譜を前にした演奏家と同じだ。音楽は深い。表現し切れたということはない。楽譜からどれだけ深く学ぶか。それは、音楽を愛すること、敬うことを根本とする。人生も全くそうだ。みんな自分につっかえつっかえして生きている。そのとき、そこからどのような歩み出しをするか。

12人の姿勢に共有されていたのが、言葉を厳密にすれば、「楽譜に忠実に」ということではなく、「楽譜に誠実に」という向き合い方であるということ。そしてその根本には音楽への愛が、尊敬があるということ。そこにある音楽の真心を発見し、表現しようとする姿勢。発見的なまなざし。それは応答的かつ創造的意志によるのです。楽譜の語らんとしている声を謙虚に聞く。そして身を挙げて応えんとする。できあいの眼差しでなぞるのではなく、初めていま出会うこととして。

さまざまな出会い。できごとと出会い、人と出会う。そう、私たちは、いま、《初めてのいま》を生きている。そして、その《初めて》は「普通に人々が、この景色は佳いだの、あの景色は悪いだのという、そんなことはほとんど意味のないことだ。人々の心の奥底を動かす物は、かえって人が毎日いやというほど見ているもの、おそらくは人々称んで退屈となすものの中にあるのだ」(中原中也エッセイ「一つの境涯」より)。私の心の奥底から湧き出する《善く生きむ》とする意欲に、まっすぐに応えていこう。

「この世界は味わい深く、大地の塵までが美しい」(タゴール)

※1913年アジア人として初のノーベル賞となるノーベル文学賞受賞